

青谷地区歴史探訪マップ

古き青谷をたずねて



青谷地区は、江戸時代には港町・宿場町として繁栄したところで、現在もその名残を表す石灯ろうや石碑、建物や町並みなどが残っています。これらは、地区の歴史や文化を物語る証、いわばまちのお宝、文化財です。

この歴史探訪マップは、こうした地域の文化財を訪ね歩き、青谷ってどんなところか、あらためて知ってもらおうと作りしました。

さあ、このマップを持ち、青谷の魅力を探して歩いてみま

青谷地区について

青谷(あおや)地区は、鳥取市青谷地域(旧青谷町)の行政的・経済的な中心で、鳥取市の最西端に位置し、西は東伯郡湯梨浜町、北は日本海に面した、面積8.35平方キロメートル、人口約2,900人の地区です。この地区は、勝部川と日置川が合流して日本海。に注ぐ流域一帯を中心とした地域で、河口には砂丘が形成されています。

この地区には、「地下の弥生博物館」と称される「青谷上寺地(かみじち)遺跡」があり、この遺跡からは、弥生人の脳をはじめ、全国的にも珍しい多種多様な遺物が、極めて保存状態の良い状態で出土しています。海を介した交易・交流が行われていたことを示す遺物や漁労具なども見られ、この地は太古から人が住みつき、港湾を中心に集落を形成していた土地柄であることがわかります。江戸時代には、廻船問屋の建ち並ぶ港町、そして山陰道(伯耆往来)の宿場町として栄えたところです。

この地区は、江戸時代までは、青屋(あおや)村、芦崎(あしざき)村、潮津(うしおづ)村(夏泊(なつどまり)村は出村)、井手(いで)村、そして長和瀬(ながこうせ)村から成り、明治10年(1877)に最初の3つの村が合併して青谷村へさらに明治22年(1889)の町村制の施行で、井手村、長和瀬村が青谷村と合併して、新しい青谷村が誕生。この地域が現在の青谷地区にあたります。なお、このとき、青谷地域の他の地区にあたる、日置・日置谷・勝部・中郷の各村も誕生しました。

(鳥取県の地図：その中の青谷地域、さらに青谷地区を指示)

大正時代後期ごろの青谷の町並み



本町側から浜町側を望む通りの家並み。「青谷海岸通り」とある。*「鉄永商店発行絵葉書」(あおや郷土館蔵)より



丸山から見た、日置川をはさむ中町(左側)と川向こう(右側 駅前)あたり。青谷大橋が流失している。*「鉄永商店発行絵葉書」(あおや郷土館蔵)より



⑥夏泊と海女

夏泊の村の成立は、秀吉の命により朝鮮出兵に出陣した鹿野城主亀井武藏守の水先案内人として活躍した筑前国(福岡県)梶免村の助右衛門がその功により文禄年間(1592~1596)に長尾灘の八方四方の免租地を与えられ、そこに住むようになったのが始まりである。(『因幡誌』)助右衛門が漁師で、その妻が海女であったことから、その漁が代々受け継がれ、現在に至っている。助右衛門とその妻を供養する石塔が、村を見下ろせる丘の上にある墓地の一角に建っている。



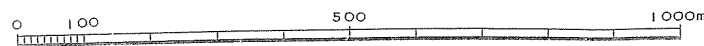
⑧長尾鼻と灯台

長尾鼻は、日本海の怒涛に浸食された断崖絶壁、洞門、奇岩が連続する岩礁海岸の岬で、鉢伏板状安山岩からなる溶岩台地である。清水が台地の上から海へ流れ落ちるところがあり、そのひとつは、良港とよばれるところで、ほかに血止めヶ池と呼ばれる気水性の池が岬先端の岩上のくぼ地にできている。この池には、大国主の神と八上姫の口マンスにまつわる伝説がある。なお、先端には昭和28年に設置された長尾鼻灯台がある。光達距離は22海里(約41キロメートル)昭和43年に無人化された。



⑦夏泊神社

夏泊神社は、夏泊集落の最も海に近い岩礁上に鎮座され、境内は狭小であるが、海に向かって、まさに漁区はじめ広く海域を鎮護している姿である。もと恵比須(えびす)と称し、夏泊地区の崇敬社である。祭神は、事代主神(ことしろぬしのかみ)で、古くから由緒ある神事が伝承されており、漁村共通の氏神崇敬心の厚さがよくわかる。石垣と弘化4年(1847)作の鳥居、天保13年(1842)作のこま犬、そして石垣はいずれも名石工川六の作であり、特に石垣の造りは優れており、景観美を表している。

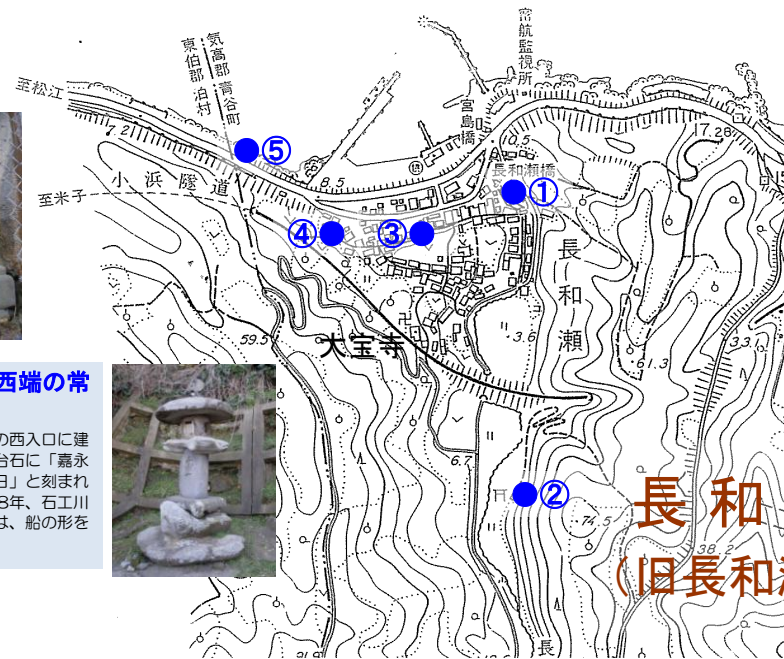


⑤因伯国境(滝跡)の不動明王像

長和瀬の村の西端にある因幡と伯耆の国境は、断崖絶壁を経て海へ入る。かつては、ここは滝となって落ちており、それが国境の目印でもあったという。現在は、国道9号線の工事で導管の中を流れるようになっているが、染み出た水が落ちている。その下には、不動明王(大宝寺)の石像が祀られており、今も花が供えられている。

④長和瀬西端の常夜灯

長和瀬の村の西入口に建つ常夜灯で、台石に「嘉永元年申五月吉日」と刻まれている。1848年、石工川六の作。台石は、船の形をしている。



③村中の旧山陰道

長和瀬の村中の中央を東西に通る江戸時代の山陰道。現在も村の中心の通りとして使われている。地元の人々、この道を「殿様街道」と呼んでいる。



①長和瀬東端の石造物

長和瀬の村の東入口に建つ常夜灯で、台石に「文久三年(1863)九月二八日」建立、「石工河六(川六)」と刻まれている。また、その西隣に三昇万雲塔が建っている。下半分が土の中に埋もれているが、碑面には、「三昇萬雲 南無大師口口寶永口」(寶永4年1707)と刻まれている。南隣には栄松吉助塚(力士塚)がある。表には「栄松吉助塚」、裏には「石工今川賢藏」



②長和瀬神社

長和瀬神社は、もと幡井大明神(鍋貝)の氏子であったが、最古の棟札から元禄年間、1700年ほどに分離したものとされる。のち、大正4年に幡井神社に合祀され、再度分離して長和瀬神社を新設されている。祭神は須佐之男命である。境内には、宝暦2年(1752)作のこま犬と、幕末の名石工川六による嘉永5年(1852)作のこま犬がある。

長和瀬 (旧長和瀬村)